



R

ジン・モハマド
M A D

マハティール とは？

マハティールは、
いまこそ
日本人へ訴える

西洋近代文明を批判する
舌鋒衰えず

二十二年間にわたってマレーシア
を率いてきたマハティール首相は、
二〇〇三年十月三十一日、惜しま
れながら引退した。それからちょ
うど一年経った十一月八日、クアラ
ルンプールのプラジャヤで、前首
相に単独インタビューすることがで
きた。

内政の舵取りから離れた前首
相には、重責からの解放感といつ
たものも感じられた。首相時代よ
りも自由に発言できるようになっ
ている。もちろん、歯に衣きせぬマ
ハティール節は健在だ。

執務室の机の上には一台のパソコ
ンが、書棚には分厚い百科事典が、
そして書棚の隣の棚には使いこん
だコーランが厳かに置かれている。
「慈悲あまねく慈愛深きアッラー
の御名において」など、コーランの一
節を刻んだ木彫は、気品に満ち溢
れ、東南アジアの伝統を強く感じ
させる。

この光景こそ、マハティールの思
想と行動を余すところなく伝えて
いる。彼の思想を支撑しているのは、

イスラームの教えである。だが、そ
れは決して近代化に背を向けるも
のではない。彼はテクノロジーの發
展に力を注ぎ、自らハイテク機器
を使いこなす。また、読書家とし
ても知られるマハティールは、貪欲
に知識を吸収し、それを生活に生
かそうと心がけている。つまり、
彼にとってイスラームは、モノの面
でもココロの面でも生活を豊かに
するための思想の基盤である。

）インタビューでは、どの質問に対
しても的確な回答が即座に返つ
てきた。まもなく七十九歳になる
高齢とは思えない反応の速さであ
る。だが、何より私が強く感じた
ものは、ココロの平静と揺るぎない
信念である。それもまた、彼の信
仰に支えられているに違いない。

終始穏やかな雰囲気でインタビ
ューは進められたが、二度だけ表
情や語気が変わった。一度は、ブッ
シュ大統領再選に関する質問した

A
GIANT
of
ASIA
volume 1

アジアの巨人

M A H A T H I E R

侠氣を見せよ、とマハティールは日本に檄を飛ばす

経済的に低迷して、国の覇気も失っている日本。
かつて一度はアジア諸国の手本と見なしてくれた
提唱者の巨人マハティール氏に喝を入れてもらい、
自信みなぎる日本になるための指針を請うてみたい。

書き手・インタビュアー・坪内隆彦
写真・カミコウベ アツシ for akp

わーすわーす
独占激語
interview

ときである。瞬にして厳しい表情に変わり、強い言葉でその対イラク政策を批判、ブッシュ再選は世界にとって大惨事だと言い切った。

もう一度は、東アジア経済グループ（EAG、後にEAC）構想を提唱した経緯について説明しているときである。EACを葬ろうとしたアメリカ自身がNAFTA（北米自由貿易協定）を形成していることに言及したとき、語気が鋭くなるのが感じられた。また、彼はブッシュ政権に追随する日本にも批判的である。

ただし、我々はマハティールの声を単なる外交政策の次元だけとらえるべきではない。モノに偏重した西洋近代文明に対する根源的な批判の声として、彼の言葉を受け止めるべきではなかろうか。

侠気あふれる人物、マハティール

七年ほど前、マレーシアへの視察

ツアーパーに参加したときのことだ。そこに参加していた二十歳代の日本人女性が、しきりに「まほ様は、

素敵」と連発する。すぐに「まほ様のことだと了解して、マハティール首相はなぜ素敵なのかと尋ねると、「侠気があるから」という。

侠気などという言葉を聞くのは久しぶりのことだった。ここで彼女が言った侠気とは、いわゆる「男らしさ」だけではなく、強きをくじき、弱きを助ける心、損得を顧みず果敢に行動する態度であろう。マハティールは、確固たるポリシ

Iを持って、理想を実現しようとしてきた。相手がどんなに強大だろうと、また批判する結果、いかなる不利益を被るうとも、不正義を見逃そそうとはしなかった。

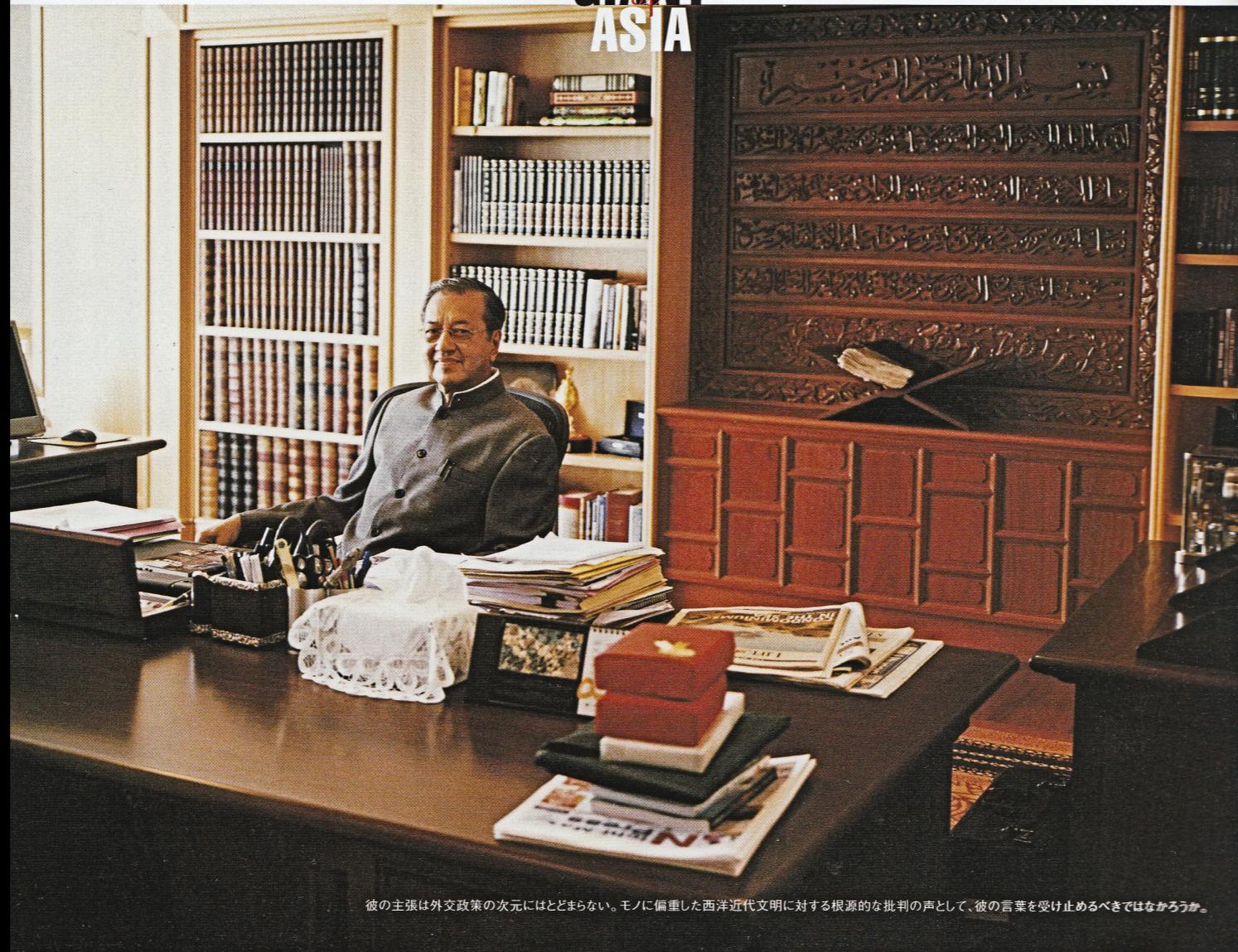
一九九七年七月、タイの通貨バーツの暴落をきっかけに、通貨危機が東南アジア一帯に波及した。地道に築き上げてきた経済は、一瞬にして叩き潰されたのである。マハティールは、ヘッジファンドなどの欧米の機関投資家が投機的な売り浴びせをしたのが通貨暴落の主因と見て、その象徴的な存在ジョージ・ソロスを槍玉にあげた。しかし、その結果、通貨と株価の下落にさらに拍車をかけることになった。それでも、彼は批判をやめようとはしなかつた。

欧米のメディアからは、市場経済を理解できない分からず屋だと叩かれた。だが、その一年後、国際社会はマハティールの主張の正しさを認めた。

根底に流れるのはイスラームの教え

マハティールは、大国に対しても遠慮なく批判を繰り返してきた。ブッシュ政権の対イラク政策を厳しく批判し、アメリカのイスラーム系ウェブサイトで、その再選阻止を呼びかけたほどである。彼がブッシュが嫌いだからではない。アメリカが振りかざす民主主義、市場万能主義、力による外交などを支えている価値観そのものに挑戦して

マハティール・ビン・モハマド (Mahathir bin Mohamad)
1925年マレーシア・クダ州生まれ。医学博士。
1964年に下院議員、1981年に統一マレー国民組織(UMNO)総裁となり、同年から2003年10月までマレーシア首相。



彼の主張は外交政策の次元にはとどまらない。モノに偏重した西洋近代文明に対する根源的な批判の声として、彼の言葉を受け止めるべきではなかろうか。

いるのである。

責任を伴わない行き過ぎた自由、
共存や相互扶助の理想を踏みに
じる弱肉強食の経済原理、すべて
を善悪に二分し、悪を力でねじ伏
せようという発想を批判している
のである。そうしたマハティールの
バツクボーンが、信仰の力である。

彼はイスラームがもともと平和
を求める教えであることを強調し、
いかなるテロにも断乎反対の立場
をとってきた。

投機家を執拗に批判したのも、
投機という行為 자체を許せなかつ
たからである。イスラームでは經
済行動においても、神から発した
万物が正しく扱わなければなら
ないという思想が貫かれている。
奪うよりも与えることによって得
られるココロの価値を彼は求めてい
る。彼の外交は、隣人を富ませる
という発想で貫かれているのである。
つまり、マハティールはイスラーム
の教えに基づいて、正義を唱えて
きた。彼は、すべての人を受け入
れられる普遍的な考え方としてイ
スラームを復興しようとしている。
しかも、本来あらゆる宗教に普遍
的な価値があると信じて、それら
を尊重する立場を明確にしてきた。

戦前、日本の輿論論者の間には、
歐米列強の植民地支配や人種差
別に示されるような、国際社会の
不正義を正そうという崇高な理
想が確かに存在した。それらを支
えていたのも、神道や仏教の信仰
に基づいた正義だったに違いない。
マハティールは、イスラームを単

に正義を支える教えとしてだけ重
視しているのではない。精神的發
展だけではなく物質的發展の基
盤となるイスラームという考え方
を推進しているのである。

かつてイスラーム教徒は、天文学、
医学、物理学、化学、エンジニアリ
ングなど、科學技術の發展をリ
ドしていた。時代を経て、イスラ
ムは科學技術の面で欧米に遅れを
とるようになったが、一九世紀後半
には、アフガニーナやアラブフア
ラムが近代に適応したイスラームを模
索した。

つまり、マハティールは人間の幸
福には、モノとココロがともに充足
されることが必要だという立場に
立ち、イスラームは人間の生活の
あらゆる側面で活かされると考え
ている。彼は、一九九一年に示した
長期構想「ワワサン2020」で、
進んだ国となるという目標を掲げ
たが、そこでは科學技術の發展と
ともに、強い宗教的・精神的価値
意識を持ち、最高水準の倫理を
持つことが追求されている。

マハティールの期待に 日本はどう応えるのか

日本はどのようにして、それら
の価値があると信じて、それら
を尊重する立場を明確にしてきた。
イントビューでマハティールは、ア
メリカの軍事プレゼンスの拡大の弊
害を強調した上で、日本は中立の
立場をとるべきだと明言している。
自分の言葉をかみ締めるように、
「もはや戦争という手段は選択で
きない」と、ゆっくりと自信を持つ
て語ったのが印象に残っている。

いま、マハティールは 日本社会の欧米化を嘆く



マハティールの安保論は、理想主
義的で、現実的ではないようにも
見える。一見すると、かつての非武
装中立論を彷彿させる響きもある。

しかし、彼は、いまや中国が軍事
力をむやみに行使しないと考え
る確かな理由を持つている。彼には、
暴力の背景には貧富の格差などの
経済的原因があると考えがある。

それだけではなく、マハティール
は安全保障の意味を問はずそと
しているようにも見える。これまで
の安保は、国民の生命と財産を
守ることだけを考えてきた。

彼はモノだけではなくココロを
守ることを重視しているのではないか
だろうか。確かに、モノ偏重の文
明の流れが変わらない限り、そ
うした考え方は受け入れ難い。それ
でも、人間の幸福がモノだけでは
なくココロの安定によつてもたらさ
れるということをアジア人たち
が再認識するようになれば、武器
を突きつけ合うことで安全を確保
することの精神的な弊害や、アメ

リカへの過度の依存による精神的
価値の喪失といった問題が、深刻
に受け止められるようになるかも
しない。マハティールは、異質な

ものを排除するのではなく、互い
の違いを認め合つて共存しようと
する努力、すべての関係を互恵的
なものにする努力自体によって、
やがて西洋近代の価値観が転換さ
れる日が訪れる信じている。

マハティールはなおも日本への期
待を捨ててはいない。彼が日本に
学べというルックイースト政策を掲
げたのは、一九六一年に初めて日本
を訪れ、敗戦から復興し、經濟再
建のために献身的に努力する日本
人の姿に感銘を受けたことが大き
なきっかけとなつてゐる。マハティ
ールにとって、日本はアジア人として
の自信の源泉であつた。だが、日
本はマハティールが学ぼうとして
いた伝統的やり方を捨てようとして
いる。いまやマハティールは日本社
会の欧米化を嘆かざるを得なくな
つた。ルックイーストが悲しいす

れ違ひに終わるのか、日本が踏み
とどまるのかを、マハティールだけ
ではなく、多くのアジア人が注視
している。

確かに、日本がアメリカに追随
せざるを得ない国際政治の厳しい
現実もある。だが、アメリカ追随
は戦前の反省や敗戦、占領によ
る後遺症ばかりとはいえない。そ
れは、価値観の大転換、つまり日
本人がモノ偏重になつてしまつた当
然の帰結なのではなかろうか。

モノを守るという発想からは、
アメリカへの依存は合理的な選択
といふこともなる。だが、信仰
の大切さに気づき、ココロの価値が
重視されるならば、日本人の行動
は損得だけではなく、かつて存在
したものに気づき、ココロの価値が
重視できるならば、日本人の行動
はできるだろう。

アジア人としてのアイデンティティ
を確立し、アジアのために活躍
してほしいというマハティールの願い
に、日本人はどう応えていくのだ
ろうか。

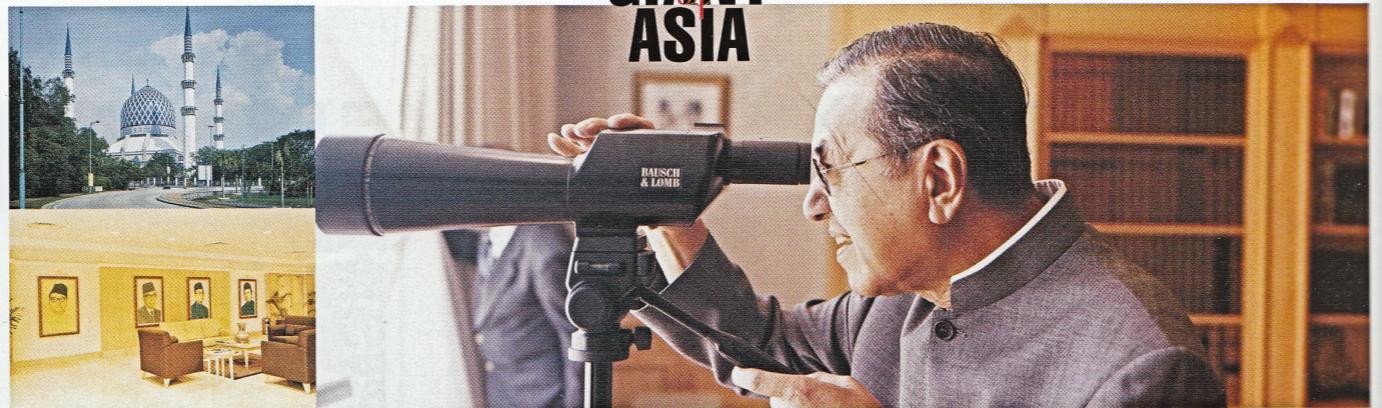
(敬称略)



INTERVIEW

マハティール、かく熱く語りき

A
GIANT
of ASIA



日本だって大国を批判できるのだ

坪内 隆彦（以下坪内）あなたは、相手が大国であろうが、いかに強大であろうが、常に勝負を挑んでいました。日本は、言いたいことがあっても遠慮して物が言えませぬ。どうして、あなたにはそれができるのでしょうか。

マハティール 聞っているわけではない。我々が正しいと考えていることを言っているだけだ。大国が間違いを犯したとき、我々にはそれについて自由に発言する権利があると思う。

ある。それを批判する権利もある。

私は、日本にもそれはできると思う。何の問題もない。我々が強いか弱いかは関係ない。たとえあなたが弱いとしても、発言することはできるのだ。

それでもアメリカは、マレーシアにとって最大の貿易相手国だ。マレーシアの輸出に占めるアメリカの比率は20%を超えていて。アメリカからの投資額も非常に大きい。相手を批判しても、こうした良い好事な経済関係を続けることができる。日本にも同じことができると思う。

ブツシユ再選は世界の大惨事だ

坪内 ブツシユ大統領が再選されました。どのような感想をお持ちですか？

マハティール ブツシユ再選は世界にとっての大惨事だ。ほかの人にはあまり配慮しない人物、世界中が反対していても、それを気にしないような人物。そういう人物は

坪内 仰る通りですが、なかなか相手を正面から批判することは難しいと思います。あなたには勇気があるように感じます。勇気を持つて強大な相手を批判する秘訣はないのでしょうか。

マハティール （笑い）。秘訣なんかはない。最も重要なことは、あなたの国をうまく管理することだ。

国を政治的に安定させ、平和を保ち、経済を成長させることである。そうすれば、国民は良い暮らしを送ることができる。国民のために良い政治を行えば、支持は必ず得られる。もし支持率が低い状態で、人々が気に入らないことを発言すれば、さらに支持を失うことになりかねない。

その点、マレーシアの政権は圧倒的多数を確保している。下院議席の90%を握っている。だから、政府はいかなる立場をも探ることができる。国民の一部が我々の言うことを気に入らず、その結果我々を支持しなくなつても、なお多数を支持を維持することができるわけだ。

東アジアは力を合わせて対抗する

坪内 あなたは、南北問題の解決に尽力してきました。首相引退後も、非同盟諸国ビジネス評議会の国際諮問委員会委員長に就任しています。南北問題解決の上

マハティール ご承知の通り、北の先進国は南の国（途上国）と大きなビジネス関係を持っていて。その中には、非同盟運動に参加するイスラーム教国も含まれる。だが、いまや貿易において、先進国

危険だ。彼は自分に強い力があると思っている。他人のことを気にせず、自分のやりたいようにやろうと思っている。

今回の選挙は、他国を侵略し、政権をすげ替え、自国の民主的なシステムを押し付け、戦闘し、人々を殺戮し、何の罪もない民間人をも殺し、ファルージャのよう

に都市全体を破壊するようなことをしている人物を、世界が承認してしまったことを意味している。彼に投票したということは、いつたいどんな結果をもたらすだろうか。彼は、自分のやっていることが正しいと考えるだろう。その結果、彼はイラクでやつたように、今度はシリアやイランを侵略して体制を変えようとするだろう。だが、それぞれの国民は侵略に対して戦う。事態はさらに悪化していくだろう。

にとつて変わらぬだけの力を備えた途上国が、数多く台頭してきている。価格競争力で、先進国は途上国に勝てない。つまり、途上国同士の経済関係をさらに拡大するときが来たのである。途上国間の貿易関係を拡大していくことが、非常に重要なことである。

坪内 一九九〇年十二月に、あなたは東アジア経済グループ（EAG, 後にEAEC）を提唱しました。その経緯について説明してください。

マハティール 我々は、GATT（関税貿易一般協定）の交渉に参加していました。しかし、最終的にGATTの交渉は成功しないと我々は判断した。このような状況で、EAC提唱に関するレポートが内閣に上がってきた。我々は、この構想を討議し、東アジア諸国の立場を強化するために、この構想を進めることを決定したのだ。二つの国単独での発言力は弱い。マレーシア単独、あるいはインドネシア単独、日本でも単独で交渉を成功させることは難しいだろう。しかし、東アジア諸国がグループとして声をあげれば、相手はそれを真剣に受け止めざるを得ない。これが、我々がEAECを必要とした理由だ。ヨーロッパはEU（欧州連合）を形成し、またアメリカはNAFTA（北米自由貿易協定）を形成している。それらは非常に強力なグループである。それらのグループとの均衡をとるためにも、東アジアのグループが必要なのである。

坪内 あなたはイスラームの教えに基づいて、独自の国家ビジョンを描いてきました。ジャマール・アッデイーン・アフガーニー、ムハンマド・アブドウフといったイスラーム思想家について、何かコメントをいただけますか。

マハティール ジャマール・アッデイ・ン・アフガーニーとムハンマド・アブドウフは、イスラーム教徒がその他の世界の発展から取り残されたようにするべきだと考へた最初の学者だ。彼らは、イスラームが来世だけでなく現世のことにも関心を向けるべきだという新しい考え方を広めようとした。

日本は正義を支持してほしい

坪内 東南アジア地域のアメリカの軍事的プレゼンスについては、どうお考えですか。

マハティール 國家間の問題を解決する方法として、もはや戦争という手段は選択できない。近代戦はあまりにも破滅的な被害をもたらすからだ。戦争をすれば、誰も勝者にはなれない。だから、国家間の問題は交渉によつて解決する方がいい。交渉のためには、将来の展望を示す意欲が必要になる。

この地域のアメリカの軍事的プレゼンスやアメリカとの軍事同盟は、この地域に敵がいると想定していることを意味する。当然、中国は自國が敵とみなされていると懸念することになる。



マハティールのバックボーンは、信仰の力である。だが、彼にとってイスラームは、モノの面でも生活を豊かにするための思想の基盤である。精神性を重視すると同時に、決して近代化に背を向けようとしている彼の姿勢は、コーランとハイテク機器に象徴される執務室の光景にも示されている。



坪内隆彦(つぼうち・たかひこ)
ジャーナリスト。拓殖大学近現代研究センター主任研究員。
1965年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。
日本経済新聞記者を経てジャーナリストとして独立。
1994年に「アジア復権の希望マハティール」(亜紀書房)を上梓。
E-Mail: asia@at.wakwak.com

いまや中国は大国である。この国を征服するようなことはできなさい。征服するには中国はあまりに大きな国である。イラクでいま起つてることを見ればわかるだろう。中国を占領しようとしたら、いついどんなことになるか。つまり、中国を占領するなどといふことは不可能なのである。ある国を占領しようとすれば、常にその国民は鬪うことになる。

経済発展することによって、中国の軍事力が大きくなることは避けられない。例えば、マッカーサー元帥による占領時代の一九四五年、日本のGDPの1%は、極めて僅かな額に過ぎなかった。だが、今 日日本のGDPの1%は巨額だ。中国も同じことである。中国が経済大国になれば、GDPの1%も巨額になる。つまり、我々が望もうが望むまいが、中国の軍事力は強化される。

こうした状況において、アメリカがこの地域に軍事力を展開することは、中国を刺激することにはならない。これは好ましいことではない。日米の軍事プレゼンスが拡大すれば、中国もそれに対抗しようとする。ある種の軍拡競争に入つていくことになる。これは非常に危険なゲームだ。

坪内 日本の防衛政策は、アメリカとの同盟に依存しています。それ以外に現実的な日本の防衛政策があるとお考えですか。

マハティール 日本はある国が友好国だからという理由だけで、その国が間違っている場合にも支持するようなことをすべきではないと思う。それは、日本にとっていいことではない。いま日本は、正しいことを支持すべきだと思う。私は、日本が中立の立場をとるべきだと思う。そして、弱い国の支持者になることを考えるべきだ。